



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ポール・ド・マンとメタファー論
Author(s)	鈴木, 純一
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 74, 1-19
Issue Date	2021-03-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80908
Type	departmental bulletin paper
File Information	01_suzuki.pdf



ポール・ド・マンとメタファー論

鈴木 純 一

1. 科学的方法論としてのメタファー

20 世紀後半以降、学術の領域において、メタファー¹への期待は概して高い。従来、もっぱら文学的な想像力（≡創造的メタファー）と関連付けられて評価されてきたメタファーは、この頃から客観的かつ学的方法論としての地位を確立していく。そのような状況を伝える研究としてよく引かれる書に M. ヘッセの『科学・モデル・アナロジー』（原著 1966、邦訳 1986）がある。日本語版翻訳者である高田紀代志は『あとがき』で、科学史の文脈から、この研究の意義と射程を 4 つ挙げている。ヘッセの研究が当時どのように読まれ、受容されたのかを推測できるので、ここから、その 4 番目のものを引用しておく。

第 4 に、「科学の隠喩説」のもつ広がりである。ヘッセはブラックの「隠喩の相互作用説」を手がかりに論を進めている。そこではレトリックとしての隠喩と認識を切り離すのではなく、隠喩が同時に認識の展開であると考えるところに要点がある。科学に限らず隠喩のこうした側面を論じた近年の書物として、訳者が知る限りでも、佐藤信夫『レトリック認識』講談社、や菅野盾樹『メタファーの記号論』勁草書房、などがある。科学の概念や手続きと、文学や日常のレトリックを結びつけた理解が求められているのである。隠喩説は、科学と社会の相互関係を 1 つの側面から明らかにすることになるであろう。（高田紀代志 1986：187）

注目すべきは、隠喩を（科学的）認識の展開の方法論である、と明言している点である。ヘッセ本人の「理論的説明とは被説明項の領域の隠喩的再記述である」（ヘッセ 1986：159）という表現からも読み取れるように、メタファー（隠喩）は説明されるべき対象をパラフレーズすることで理解を可能にし、延いては新たな認識をもたらす機能を持つとされる。その際、「隠喩的再記述」という表現には、従来の科学の文脈でいう「アナロジーによるモデル化」の動的展開という意味も含まれている。

人文諸科学においても、隠喩の「学術」における方法論としての有効性は多くの領域で確認されている。法学者松浦好治は『法と比喩』という研究書の最後で、「比喩（＝メタファー：引用者）をベースにした思考方法」が、「基本的な観念の形成、言葉の理解、事柄の理解の深化と発展、新しいものの見方の創造などさまざまな形態で法的な世界を支えていること」（松浦 1993：135）が確認できたと断言している。松浦はこれをさらに「解釈システムの公理系化」と関連付け、クーンを引きながら、「比喩の選択は、パラダイムの選択」（松浦 1993：160）でもあると解釈している。

ヘイドン・ホワイトの歴史学においてもメタファー（喩法）は分析視点として中心的な役割を占めている。『メタヒストリー』（ホワイト 2017）のなかで、彼は歴史の時代把握の形式的分類を、比喩の観点から説明する。その妥当性についてはひとまず保留しておくが、メタファー、メトニミー、シネクドキそしてアイロニーに分類された喩法が、その時代時代の歴史把握あるいは歴史解釈の基本的なパターンをなし、この喩法のサイクルパターンが段階的に進化すると同時に、再帰しつつ循環するモデルを提示している²。

諸学におけるメタファーへのこのような視線は、さらに人間の「知」の原理的な領域へと進んでいけば、認知心理学におけるメタファーへの着目とも関連付けられるだろう。認知心理学においては、人間の認知ないし認識能力の原理そのものがメタファー、比喩、アナロジーの構造を取っていると考えるからである。レイコフが著書の題名とした「Metaphors we live by」（レイコフ&ジョンソン 1986）という状況は、人間の身体感覚に由来し、そのアナロジーによって対象の把握を可能にするメタファーが、知的な能力の原点として、学問の様々な領域にも浸透しているということを伝えようとしている。

文芸批評あるいは美学の領域に目を転ずると、ポール・ド・マンが、『美学イデオロギー』（ド・マン 2013）に収録されている『メタファーの認識論』を発表したのも 1970 年代の終わりであった。その名の通り、「メタファーの認識」を歴史的、原理的に論じたものである。しかし、ここでの「メタファーの認識」の意味するところは、上述の諸学における「メタファーによる認識」、あるいは「メタファーを介した＝ツールとした認識」と完全に重なるものではない。そこには、ある意味微妙ではあるが、原理的には大きな違いが存在するように思われる。

先取りしておけば、ド・マンのメタファー論は、「メタファーのメタファー」という構造を核にしている。ド・マンに対する文学史的観点からの評価、すなわち「ポスト・モダンの文芸批評家」として、このような言い回しは、単にことばの持つ遊戯性を実践していると受け取られかねない。しかし、見るところ、ド・マンの記述は極めて論理的かつ歴史的に「メタファーのメタファー」を問題にせざるを得ない状況、その必然性を粘り強く追っていくものだ。「メタファーのメタファー」とは、「メタファー（という表現現象）そのものをメタファーとしてみる」、言い換えれば「メタファーの二次（メタ）観察」の必然性に由来する。ド・マンのこ

のような見方は、後述するように、その濃度（純度）の差はあっても、ニーチェやデリダの（脱構築的な）「読み」の系譜に連なっている。この系譜は、先に挙げた諸学における認識の手段としてのメタファー観、方法論としてのメタファー観と、大きく見れば定義的な意味は一致しているとしても、その機能的な意味（意義）において「ずれ」が生じているように思われる。この「ずれ」の輪郭を少しでも明らかにすることを本論の課題としたい。

2. メディアとしてのメタファー——接続・切断と意味の多重化

メタファーという現象を、辞書的な定義から少々展開して、ここでは暫定的ではあるが独自に次のようにまとめておく。すなわち、ある表現 X が、その本来の形容対象とされる A を指示する（暫定的に「本義」とする）のではなく、何らかの形で、本来の形容対象ではない B を指示している（暫定的に「転義」とする）と考えられる（理解される）場合、この表現 X を（広い意味での＝比喩全体の総称としての）「メタファー」という。この場合、対象 B 本来の表現とされるものを Y とすると、メタファーという現象によって様々な関係性の揺れや動きを見ることができる。すなわち、 $X=A$ および $Y=B$ の関係だけが一般に認められていた対応であったのに対し、メタファーによって、まず $X=B$ という対応関係が生じてしまう。この関係は、当初の $X=A$ と重ねられると、対象相互間で $A=B$ という関係性も理論的に引き出される。さらには、ここから表現相互間の関係へも波及し、 $X=Y$ という理論的可能性ももたらす。すなわち、それまで差異化され同一視されることなかった A と B ないしは X と Y の関係が同一視（あるいは接続）される可能性が現れるのだ。

もちろんこれらがすべて同時に起ることが前提とされているわけではない。メタファーによって主題化され、最初に顕在化するのは $X=B$ の関係である。この関係を優先して考えれば、もともとあった本来の $Y=B$ という関係が、一時的にせよ、解除される（あるいは切断される）ことになる。すなわちメタファーによって $X=B$ という転義的対応関係が理解されている場合、 $Y=B$ という本義的關係は切断されるか、あるいは、少なくとも一時的に潜在化する。このプロセスは、さらに複雑なことに、出発点であった $X=A$ および $A \neq B$ という本来的な関係性をも揺るがす事態を引き起こす。

このように見れば、概念メタファーに関する研究の蓄積が示すように、メタファーという現象は、表現と対象の、表現相互の、そして対象相互の同一／非同一の安定的な関係に亀裂を入れ、同一化と差異化の不安定かつ不確定な動きを誘発する機能を持つ。同一化の方向性を接続、非同一化（差異化）の方向性を切断と見るならば、メタファーとは、まさに繋ぎ合わせ、切り離し、また繋ぎ合わせるような、触媒にも似たメディアとしての機能を有している。メタファーはメディアとして、表現と対象の関係、表現相互の関係、対象相互の関係それぞれを、

接続と切断という形で、解体すると同時に再構築し、関係を流動的に更新する能力も持ち合わせているのだ。

関係のリニアな時間軸上の変化ばかりではない。潜在的か顕在的かの交替はあっても、 $X=A$ でもあり $X=B$ でもある、という重層的な状況としての展開を考えれば、メタファーはある表現の意味あるいは指示対象を二重化（多重化）することになる。この事情の波及的意味は大きい。対象の相互関連の可能性を一気に拡大し、複雑性を急激に高める結果を伴うからだ。

見方を変えれば、このような状況が、メタファーによる新しい関連性の発見、「創造的メタファー」、つまり「新たな相貌を生みだす隠喩」（野矢 2011：427）としての性格と繋がるのかもしれない。ある程度安定的に保たれていた指示対象（とりあえず「シニフィエ」としておく）と指示表現（とりあえず「シニフィアン」としておく）の対応関係、そしてそこから派生する記号連関ないし言語の意味体系に、メタファーは徐々に侵食し、不安定な揺れをもたらす。接続と切断の両機能は、顕在化する関係性と潜在化していた関係性を交替させもする。つまり、可変的かつ流動的なネットワークへと体系を変えるのだ。

その動因はメタファーの持つ「喩え」としての力である。喩えとは冒頭の学的な解釈によれば、類似でありアナロジーである。しかし、その類似性、アナロジーという現象が、例えば対象を眺める角度、光の特定の当たり方、音の強弱や持続する時間、見るものの身体的な条件等、極めて偶発的な条件に左右されるとするならば、どうなるだろう。メタファーを可能にしている関連性、類似性やアナロジーに含意されている「共通項」は極めて恣意的なものといわざるを得なくなる。本義から転義を恣意的に引き出し、さらには両者の関係性を極めて不安定なものにするメタファーは、むしろ言語の曖昧さを作る要因ともいえる。このような観点から、厳密性を要求するような概念体系を考えた場合、むしろメタファーはネガティブに見られることになるだろう。

3. メタファー批判

先に挙げたド・マンの『認識論としてのメタファー』は以上のようなメタファーへの批判的な見方の歴史的系譜から論を開始する。最初に、引き合いに出されるのはジョン・ロックである。ロックは「レトリックの濫用を控えようとする啓蒙思想の自己規制を模範的に、あるいは少なくとも典型的に示している」（ド・マン 2013：89）からだ。

ロックは啓蒙思想にとって重要な意味を持つ「観念」の解明と記述にあたって、その前提となる言語の検討が極めて重要であることに気付いたという。ロックのテキストから、その事情が述べられている箇所をド・マンは敢えて長文にわたり引用している。

私は知識が言葉と極めて密接に結び付いており、したがって、まず言葉の力と意味作用のありかたを十分に観察しなければ、知識に関して明晰かつ適切に述べることはほとんど不可能になるだろう、ということに気づいた。(…中略…) 少なくとも、われわれの知性とそれが観照し把握しようとする真理とのあいだに、言葉はおおいに介入している。いわば目に見える物体が何らかの媒体を通り抜けてゆく場合のように、言葉の曖昧さと無秩序さはしばしばわれわれの目を曇らせ、われわれの知性を騙すのである。」(ド・マン 2013 : 89)

ド・マンの見解では、ロックの言語観はある意味明快である。「ことば」は我々の「観念」と、把握しようとする「対象」ないし「真理」とを結ぶ「媒体」である。ことばには、それ自身の姿や特性を極力消し、対象をできる限り正確に写し取る鏡になることが求められている。ところが言葉は余計な「介入」をする。無色透明であるべきはずの言葉は、「われわれの目を曇らせ」、「われわれの知性を騙す」。原因はことばの「曖昧さ」と「無秩序さ」である。何がことばの曖昧さと無秩序さをもたらすのか。ド・マンの引用によれば、それは「比喩」の力である。ロックは「比喩」の力には言語を誘惑的かつ欺瞞的に用いる可能性がはらまれており、その可能性は、複数のテキスト間をまたいで意味の多重化をもたらす「譬喩 (トロープ)」に限らず、人を説得しようとする言説においてもみられるという。ド・マンはさらに「長々と引用するに値する一節」をロックの『人間知性論』から引いている。

機知や空想は無味乾燥な真理や真の知識よりも喜ばれやすいから、言語における比喩的な語りや引喩が言語の不完全さや誤用の一種と認められることは、まずないだろう。(…中略…) もしわれわれがあるがままの事物について語ろうとするならば、次のことは認めなければならない。すなわち、秩序や明晰さを除くあらゆるレトリックの技術、雄弁術が創出したあらゆる人工的で比喩的な言葉の応用は、虚偽の観念をほのめかし、情念を動かし、それによって判断を誤らせるものにほかならず、したがってまさしく完全な詐欺なのである。それゆえ、いかに見事な修辞や称讃に値する修辞が大熱弁や大衆演説のなかでレトリック技術や比喩的な応用を用いようとも、そうした技術や応用は、啓発したり教化したりしようとするあらゆる言説にあつては、絶対に避けなければならない。(ド・マン 2013 : 91)

ド・マンの引用をパラフレーズしておけば、雄弁術としてのレトリック、人を説得するための比喩—このようなことばの「技術」や「応用」は、「あるがままの事物」について、すなわち「真理」について語り、あるいは啓発し教化する言説にあつては、決して用いてはならないのだ、—というのもそのような言語は「完全な詐欺」なのだというわけである。ロックのこのよ

うな言語への不信と警告は至極まっとうなものであろう。人はしばしばレトリックの罠にかかって誇張に快感を覚えたり、より刺激的な言い回しを求めたりする。それがある許容範囲を超えれば、単なる誤解ではすまなくなり、争いが起こるかもしれないし、修復もままならないかもしれない。ロックの別の表現を借りれば「誤謬と欺瞞の強力な道具」は、魅力的であるがゆえに大変な危険をはらんでいるといえる。とりあえずこのことを確認してから、もう一度ロックの言葉を見ると、奇妙なことに気が付く。言語に対する不信と警告を述べるロックの言葉自身が、このような警告を裏切り、かいくぐるような動きをしているのだ。先の引用に続く部分はこうなっている。

雄弁術は麗しき性〔女性〕のように、圧倒的な美しさを内に秘めており、己に逆らって語ることなど決して許さない。それゆえ、人々が欺かれることに快樂を見出しているかぎり、こうした欺く技術を非難しようとしても無駄である。(ド・マン 2013: 91)

ド・マンは次のように解釈する。ここで使われているのは、ロック自身が戒めている比喻表現である。もちろん、ロックにしてみれば自らの考えを「強調」する必要があることであろうし、またそのような意味での一定の「効果」を認めることができるであろう。しかし、ロックが「あるがままの事物について語ろうと」しているのならば、そして、そのために言語を用いているとするならば、ロックの言い方に従えば、このような表現は「判断を誤らせる」ものであり、「絶対に避けなければならない」。言い換えれば、ロックのオブジェクトレベルでのメッセージ（内容）は、その表現のメタレベルにおけるメッセージ（形式）と整合性が取れなくなる。

実は、ロックは、メタファー（レトリック）のみならず言語そのものに対して同様の不信感を抱いていることを表明している。ド・マンが引いている部分を孫引きすれば、言語とは「事物それ自身に存する知識の源泉を台無しにする」かもしれない「導管」、それどころか「公共の利用のために知識を配分する管を壊したり詰まらせたりする」かもしれない「導管」なのだ。すなわち、ロックにとって、言語は、言語一般は必要悪である。言語はその構造上、比喻としての性格から完全に脱することができない。従って言語で伝達をするということは、すでにその時点で、ロックの言葉でいう「観念＝真理」から遠ざかっていく。手段として用いざるをえないが、言語とは、ロックの観点から見れば、本来の規範的役割を決して完璧に果たすことはない道具、常に不純な道へと迷い込んでしまうツール、ということになる。

とはいえ、先に見たように、ロックはそのような自らの考えそのものを言語によって、伝えようとしている。仮にその伝える言葉そのものが、ロックが痛烈に批判する、メタファー＝比喻としての動きを免れ得ないのであるならば、ロックの伝えようとしているメッセージは、先に見たように、オブジェクトとメタでの、対象と形式のレベルでのメッセージの不整合、論理

的な非一貫性が見做されてしまう。

ド・マンによれば、この段階から、とりあえず二つの展開が可能になる。一つは先ほど述べた、ロックの記述の自己否定自己言及文のパラドクスであると捉え、その論理的な是非と、表現の妥当性について検討する方向性である。言い換えれば、ロックの言説の妥当性そのものを問う考え方である。もう一つは、ロックの意図を一旦考慮から外し、このような自己矛盾するテキストそのものの更なる比喩的な意味、メタメッセージを取り出す方向性である。後者の方向性を取れば、ロックのテキストはメタファーを批判することで、メタファーそのものの特性について語っているのではないか、という解釈の可能性が出てくる。すなわち、テキストに従って、言語とはその構造上メタファーであらざるを得ないのならば、このテキストの展開している思想とは、書き手の思惑とは別のレベルで、メタファー論として考えることができるのではないか、という可能性である。ド・マンはこのような状況を、以下のように表現している。

そして実際、その後ロックが言葉と言語にかんする理論を展開してゆくにつれて。彼の構築しているのが、じつは譬喩（トロープ）の理論であることが明らかとなる。もちろん、彼自身がこのことをはっきりと自覚し認めていたとは、とうてい思えないだろう。ロックを読む場合、彼自身の明示的な陳述にある程度は逆らい、あるいはそれをまったく度外視することが必要になる。（…中略…）少なくとも、ロックを読もうとするなら、明示的な陳述（とくに陳述に関する明示的な陳述）を手がかりに読むのではなく、彼自身のテキストにみられるレトリックの動きを手がかりに読むことが必要となってくるだろうが、しかしレトリックの動きというのは意図や固定可能な事実などに単純に還元しうるものではない。（ド・マン 2013：93）

ロックのテキストを正確に読むには、ロックの意図に逆らって（あるいはいったん無視して）読む必要があることを、ド・マンは強調する。ロックが伝えようとするものと、ロックのテキストが語ることとは、そもそも一致するわけではないことを、ポスト・モダンの、脱構築の文芸評論家としてド・マンは強調する。とりあえず、次の三点を確認しておく。

一つめは、ロックの言語観は、一次観察のレベルでは、すなわちオブジェクトレベルでのメッセージでは、言語における比喩＝メタファーが対象を曖昧化すると批判していること。言語は「観念」や「真理」を伝えるのに、必要ではあるが、その目的を達成するためには完全に整備されているとはいえない、その構造上、言葉とその指示対象の一对一対応を常にすり抜けていくような動きをする「欠陥」があること。これはロックのテキストが語っていることを「字義通り」に受け取れば、見紛いようがない。

二つめは、ロックはこのような批判を、自らがその欠陥の原因と見做す比喩＝メタファーを

用いつつ行っており、これを論理的に厳密に考えれば、自己否定自己言及文の決定不可能な命題となっていること。あるいは、オブジェクトレベルにおける批判は、メタレベルにおける形式において反転し、論理的な非一貫性をもたらしていること。この、いわゆる「自己否定する自己言及文」の論理展開（パラドクス）は、ホワイトヘッド、ラッセル、さらにはゲーデル等の形式論理学において、自己言及が可能なほど発展した形式システム一般がもつ不可避の「決定不可能な命題」として定式化（＝不完全性定理）されている。

三つめは、このテキストそのものが、言語あるいは比喩の反語的構造を明らかにするメタファー論として機能していること。ロックのテキストは、そのメッセージとは逆に、メタファーを主題とする言語論なのだ。このことを、ド・マンもロックを「字義通り読んではいけない」という表現で明らかにしている。ド・マンがロックから距離を取りつつ、テキストそのものからメタメッセージとして引き出したものを、言い換えれば二次観察の視点からの解釈を、オブジェクトレベルでのメッセージよりも優先する。後で見るように、ド・マンはこのような視点の転換、ないし視点の移動する不安定な動的なプロセスを、テキストの自己増殖するメカニズムとして肯定し、救出しようとする。

いずれにせよ、ド・マンはロックのテキスト自体から、ロック自身の否定に対抗して、あるいはその否定を極めて生産的なメタファーとして読むことによって、つまり書き手としての主体をカッコに入れることによって、重層的な「メタファー論」を手に入れている。ド・マンも、書き手の意図という限界を超えて、自律的なテキスト論として展開する可能性を追求しているわけだ。

4. メタファー＝テキストの自己言及性へ

テキストの自律性、ないし自己言及的自己再生産とメタファーを関連付けるのに、ド・マンが次に引き合いに出すのは、エティエンヌ・ボノ・ドゥ・コンディヤックである。ロックの影響下、独自の認識論を展開したこの18世紀の啓蒙思想家は、その最初の著作『人間認識起源論』で、ある意味、というより、やはり、言語論を展開している。ド・マンが着目するのは、コンディヤックが分析する「抽象概念」の構造である。コンディヤックによれば、抽象とは、個別的な差異を捨象し、共有する特性を意味することになるが、これは古典的な意味でのメタファーの生成プロセスとまったく同じ構造になっているとド・マンは強調する。

先ほどの「メディアとしてのメタファー」論の形で説明するならば、対象Aを意味する表現Xが、それと共通する特性Pを持つがゆえに、対象Bに対しても適応される。この場合表現Xは、本来対象Aを総体として、すなわち対象Aのあらゆる特性を全体として形容する表現であった。ところが、共通の特性Pを持つがゆえに対象Bにも用いられた瞬間、すなわち

対象 B に対象 A をつなぐ「メディアとしてのメタファー」として用いられた瞬間、表現 X は対象 A と対象 B の共通の特性 P の表現へと抽象化される、というメカニズムだ。

ここでは「抽象概念」と限定されているが、このようなメタファーを介在にしてことばを抽象化するプロセスはすべての概念、さらにいえばすべての言語がもつ、もたざるを得ない宿命でもあるとされる。ド・マンはニーチェの『道徳外の意味における虚偽について』とルソーの『人間不平等起源論』を、ここで、引き合いにだしている。

130 年ほど後にはニーチェがこれと同じような議論を展開し、「木の葉」(Blatt) のような語は「等しくないものを等置すること [Gleichsetzen des Nichtgleichen] によって、そして「個性的な差異を恣意的に脱落させること [beliebiges Fallenlassen der individuellen Verschiedenheiten] によって形成されるのだ、と申し立てることになるだろう。またコンディヤックの数年後には、ルソーが『人間不平等起源論』で支配について分析する際に、やはり同様の議論を展開することにもなる。コンディヤックが「抽象概念」という言葉を用いる場合、それがメタファーと「翻訳する」ことができる言葉なのだと推断することは、まったく道理にかなったことなのである。(ド・マン 2013 : 107-108)

さて、この「抽象概念」に対する、ド・マンではなく、コンディヤックの評価である。ド・マンによれば、「疑いもなく絶対に必要である」と一方では言い、他方では、この「抽象概念の持つ誘惑的な力が合理的な言説に与える脅威」についても警告する。この警告は、ロックがレトリックに見た脅威への反応と基本的には同じものであろう。抽象概念は、あるいは言語は合理的な言説に対して敵対的なのである。

しかし、コンディヤックで興味深いのは、さらに踏み込んで、言語の自己増殖的な運動にまで言及している点にある。あるいは言及せざるを得ないところまで、「メタファー論」を進めてしまっている。上述したように、コンディヤックにおける抽象概念には、肯定と否定の両義的な性質がはらまれており、それらを使う側が自在にコントロールなどではしない。このような状況を、コンディヤックは奇妙な「比喩」で表現している。すなわち、何者かが強迫観念に衝き動かされて一匹の怪物をつくりあげたあげく、その怪物に完全に依存するようになってしまい、しかもそれを殺す力が彼にはない、というような譬え話をしているのだ。このような事情を、ド・マンは言説の自己言及性と捉え、以下のように解釈している。

言葉は譬喩として認識するところから出発したら、一種のお話を語る行為にたどり着くことになったわけである。つまり、物語 (ナラティヴ) が連続的に紡ぎ出されてゆくような事態にたどり着くことになったわけである。(…中略…) 物語りの指示対象となっているものが、じつは当の言説そのものの譬喩論的な構造なのだとすれば、その物語はこの事実

を説明しようとする試みにほかならないことになるだろう。これこそまさに、コンディヤックのテキストのなかで最も厄介だが、最も意義深くもある、あの章節において起っていることなのである。(ド・マン 2013: 109-110)

仮に、この自己増殖する言説をかりうじて統合する主体（精神）があるとすれば、それは、この言説の外部に根拠を与えられた、この言説から自由な、何らかの存在者ではなく、当該のテキスト自身、それらを可視的にしている要素である言語＝メタファーによって、事後的に、構成されるものとなる。あるいは、さらに踏み込んで、主体（精神）が自らの存在を形あるものとして構成し、自分自身の根拠を明らかにするためには、これしか手だてがない。存在者として現れるもの（対象）も、それらを統合した地点から何らかの意味を与えるもの（主体・精神）も、すべては言語であり、延いてはメタファーなのだ。

事物のうちにはけっして存在せず、それ自体としては言語行為的〔verbal〕でしかない精神活動によって措定されるような類似性—存在なり同一性なりといったものは、こうした類似性から生じるものなのである。しかもここで言語行為的だというのは、この文脈では、幻想の類似性（「否定性を共有している点で類似している」という決定的な幻想）にもとづいた置換を認める、ということの意味している。こうして精神ないし主体こそ、中核となるメタファー、メタファーのなかのメタファーにほかならないことになる。（…中略…）つまりロックの場合には、漠然とした曖昧なかたちで譬喩の理論が示唆されていたにすぎなかったのにたいして、コンディヤックになると、それがもっとはっきりと限定されてメタファーの理論として示されるようになるのである。（ド・マン 2013: 114）

ここにおいて、ド・マンが「コンディヤックのメタファー観」を介して、敢えて伝えようとしているのは、本来、前提としての存在者であった対象と、それに奉仕するはずであった言語（メタファー）の優先順位あるいは起源が逆転していることである。「はじめに言語があった」、これが、言い換えれば「はじめにメタファーがあった」と解釈され得る、解釈されてしまうところまで行きつくのである。このことばの暴走に歯止めをかける可能性をド・マンは、とりあえず、カントに託すことになる。

5. 図式と象徴

カントのこの問題に関する考察の要点を、ド・マンの引用に基づいてまとめると、次のようになる。ド・マンが、メタファーに関して、カントから引き出したものに注目する。

まずカントは『判断力批判』のなかで「直感的描出」について語っている。直感的描出とは、人間の五感においては十全に捉えきれないものを、何らかの形で五感の前に現出させる能力で、「活喩」に相当する。言い換えれば、「外観（フェイス）をもたないものに何らかの外観を与える」比喩表現の過程をいう。この直感的描出は、カントによれば、「図式的な直感的描出」と「象徴的な（記号的な）直感的描出」に分けられる。「悟性」の対象であり、純粹でア・プリオリな統覚に関連するのが「図式的な直感的描出」である。例えば三角形等の幾何学的な図形がこれに相当する。他方、「理性」の対象であり、アナロジーによって見いだされる（作り出される）類似性を基にするのが「象徴的な直感的描出」である。この具体例としては、啓蒙的国家を有機的身体と、専制国家を機械と象徴する形象化が挙げられている。

この区別によって、言語も、「合理的」精確さを有する図式的言語の存在を基礎に置くことが可能になる。もう一方の、「メタファー」として伝達の効率性を持つが、「不正確」でもある象徴的言語は、前者の図式的言語による言い換え（還元）が可能であり、認識論的に信頼するものへと書き換えられるとされる。理論上、この通りに事が進むのであれば、ロックとコンディヤックにおいては「認識上の脅威」であった、統御できない言語のメタファー＝曖昧さの問題は、この分類、使い分けと書き換えで、解消されることとなる。

しかし、ここでド・マンは、このことを説明するカントの記述に、あえて、ほころびを見出す。問題は図式的と象徴的の区別に関する記述にある。カントにおいては、「図式的直感」と「象徴的直感」の違いは、「批判的精神」にとっては明白であり、決定的に（ア・プリオリに）区別することが「おそらく」可能だとされている。この前提に基づいて、先に挙げた言語の脅威に関するカントの解決策は機能することになる。ところが、ド・マンが着目するのは、この事情を説明するカントの文章にある「おそらく vielleicht」という言葉である。このことばからド・マンはカントの解決策の持つ曖昧さ（＝致命的欠陥）を以下のように指摘する。

図式と象徴の区別はそれ自体ア・プリオリなものなのか、それとも〈これを区別しておけば、直接的にはできない定義づけの作業も、可能になるのではないのか〉という期待のもとで、単に「推測され」ているだけなのか。（…中略…）「おそらく」可能だ、といったような言い方が許されてしまえば、その瞬間から図式的な直感的描出に関する理論は説得力をほとんど失うことになる。（ド・マン 2013：119）

追いつめかけられるように、ド・マンはさらに、カントが用いている「想定する unterlegen」というメタファー表現に対して、「区別の厳密さを語っている言語が、自ら排除しようとしている不確定要素をふたたび導きいれているのだとするならば、そうした厳密さなど、とうてい維持されるものではない。」とも批判している。

ド・マンのカント批判の要点は、やはり、自己否定自己言及文のパラドクスをテキストに見

出し、その命題の論理的な決定不可能性を引き出すことにある。アプリアリで図式的な直感的な判断と、曖昧で象徴的な判断とを区別する判断が、メタファーによる象徴的な判断によって記述されるとするならば、その記述自体の認知的な厳密性は、決定不可能な命題となり、保証されない。つまりカントの分類法による記述では「ロックとコンディヤックが抱え込んだ難問は依然として克服されていない」ことになってしまう。

それではこの難問から脱するためにはどのような方策があるのか。ド・マンが提示するのは、このようなメタファーを厳密なものへと統御しようとする試みそのものを方向転換させる、すなわち前提となっている問題そのものの中心点をずらしていく「読み」の実践である。図式的と象徴的、厳密と曖昧等、あらゆる形態の言語のあいだには、明確な境界線を引くことは不可能である。むしろド・マンが取り入れようとするのは、テキストそれ自体の矛盾を進んで受け入れる読み方、すなわち「テキストそれ自体のレトリックを進んで考慮に入れるような読み方」なのである。

メタファーの原理的問題に戻る。メタファーとは、ある表現に「本義」のみならず「転義」が感知（理解）されたとき、すでに、生じている現象である。ある表現がメタファーであるかないかは、その表現の理解の場で、事後的に、決定される。すなわちある表現が、それを受け取る場を離れて独立に、「字義通り」であると断言することはできない。すなわち、あらゆる表現は、どのような場合も「メタファー」として読むことができる、あるいは、対象そのものの不確定性を考えれば、あらゆる表現はメタファーとして読むしかない、ということもできるであろう。

カントから引き出したド・マンの以上の様なメタファー観から考察するのであれば、メタファーを問題視し排除しよう（制御しよう）という試みそのもの、その前提に問題があるのではないか、という疑いが生じる。あるいは、そのような問いの生産性、ないしは有効性そのものを何らかの形で転換する視点が必要なのではないか。無限のメタ後退に陥るのを避けるために、とりあえずはテキストをメタファーとして捉える認識論、すなわち同一化ではなく差異化を基礎に据える認識論を考えてみるのが可能だろうか。そこで初めて、認識とレトリックの系譜が連動してくるのかもしれない。

6. 「メディア／形式」の差異化

メタファーの反義語とは何であろうか。メタファーがある表現が「転義として理解」される現象と考えれば、その反義語とは「本義あるいは同義として理解」されることを意味するだろう。このことをもっとも純粋な形で、一語で表すことばは、同語反復（トートロジー）あるいは複製（コピー）ではないかと考えられる。「転義」とは、想定されている「本義」との何ら

かの「ずれ」、「差異」が感知されていることを言う。逆に、その「ずれ」ないし「差異」が読み取られない現象、それを表す言葉として同語反復あるいは複製がある。

それではその「ずれ」あるいは「差異」は何によって生じるのであろうか。あるいはそのずれや差異の性格を決定するものとは何なのであろうか。このことに関しては、認知心理学や情報工学を始め様々な領域からアプローチが行われ、様々な見解があるが、一つ言えることは、それは、対象とその言語（表現）を取り巻く諸条件、環境によって変化せざるを得ないということである。人影は木に見えることも動物に見えることもあるだろう。それは光や風の自然要因かもしれないし、目や脳の身体の状態によるかもしれない。すなわち、表現とは、状況によってその形を決定するということである。

社会学者のルーマンは、自身の社会システム理論において、コミュニケーションにおける言語の特殊性を強調すると同時に、言語における「メディア／形式」の差異を重要視する。ちなみにルーマンは言語のみならずすべてのコミュニケーション・メディアにこの形式との差異を認めている。（ルーマン 2009：215）前者のメディアとは、とりあえずは、可変的な「素材」だということができる。ゆえにメディアとは、その時の状況や組み合わせによっていかようにも変化できる能力、差異を創り出す能力を持っている。後者の形式とは、そのメディアが何らかの「意味ある形」となったもの、コミュニケーションにおいて情報として伝達可能な状態になったもののことを言う。メディアは自らを変化させながら、そのつど形式となる。こうして、初めて言語は受容され得る（＝理解可能なもの）となる。ルーマンはこのような事情を次のように説明している。

言語自らが、メディアと形式の差異を言語独自の形で設定することができるようになるためには、言語のメディア基体が、すなわち音声と意味との差異があまり特殊化されていなければならない。さもなければ、すべてが常にすでに言われてしまっているがゆえに、もはや何もうことがなくなってしまうだろう。この問題は、言葉と文との分化によって解決される。言葉もまた意味を伴うとともに、音韻を配置することによってできている。しかし、言葉によってすでに、それがどんな文へと組み上げられるかが確定しているというわけではない。言語はこの差異を経由することによって初めてコミュニケーションに、一時的な状況に対して、一時的に適応する能力をもたらしことができる。そしてさらには、一時的な意味構築の能力ももたらされる。一時的であるがゆえにそれを後から確証したり取り消したりできるのである。このようにして初めて、次の点を考慮できるようになる。すなわちコミュニケーションにはコミュニケーションが接続していくのであり、〔接続する以上は〕何かまだいべきことが残っているはずだ、と。（ルーマン 2009：238）

ここでの「文」とは、ある表現行為が実際になされた際の言語の形と考えればよいだろう。

すなわちメディアである言語（正確には音声と意味との差異）は状況に応じて文となり、何事かを伝えようとする、あるいは何事かが受け取られ理解される形式となる。その形式は、その都度作られる。そうでなければ、すべて今まで使われた形式の反復であり複製となってしまふ。言い換えれば、トートロジーとコピーの果てしない繰り返し、合わせ鏡の無限反射でしかありえなくなるであろう。

形式とは、その都度、変化するメディアとしての言語から作られる新たな表現、文、意味である。状況に適応する能力（＝差異化する能力）とは、このようなメカニズムを指す。その形式は確定されていない。そしてその形式には、さらに新たな言語の形式が接続する。コミュニケーションがコミュニケーションに接続すること、その自己再生産能力を「オートポイエーシス」と名付けている。これは、ルーマンの社会システム理論の自己言及構造を表す中核的表現である。（ルーマン 2009：59）ただし、このような表現そのものも、この文という形式になって初めて、つまり状況に適応して初めて、自らを産み出し接続することができ、意味を持つものになるとされる。すなわち、自己言及構造に関する自己言及が、もともとルーマンの理論には組み込まれており、それがトートロジーとコピーの無限後退を逆説的に回避しているのである。（鈴木 2019）

この構造は、先に見た、ロックやコンディヤック、カントが批判し、ド・マンが救い上げたメタファーの構造と重なる。メディアとしての言語（表現）は、さらなる言語（表現）へと接続されなければならない。あるいは言語（表現）とは、自らを保持するためには接続せざるを得ない原理、自律的に継続する構造をその発生の根源的な要因としている。その接続が、接続であること、つまり同語反復やコピーとして無限のループに閉じ込められることなく、実質的な意味の変化、更新、転換という運動、そのような生命力にも似たオートポイエーシス（自己再生産）を継続していくためには、自己言及における差異化の機能、自らを常に二重化・差異化・転義的に表現する能力、すなわちメタファーとしての力が必要であるだろう。

7. ニーチェ、デリダ、ド・マン

ニーチェは『道徳以外の意味における真理と虚偽について』のなかで、言語に関し「すべてはメタファーである」と言い切っている。その際、ニーチェはメタファーを二種類に分けている。「木の葉」という物理的な対象（現象）が、「木の葉」という言葉として形象化されるメタファーを、彼は「第一の隠喩」ないし「直感的隠喩」と呼ぶ。これは後に、「価値を創造する」能力と繋げられ、極めて肯定的に評価される。一方、個別的な様々な在り方を、「木の葉」という言葉にまとめ、延いては概念化していく原理を「第二の隠喩」と呼び、こちらに対しては否定的な見方をしている。（ニーチェ 1995：473-475）評価の妥当性ないし展開すべき解釈に

については保留しておくとして、この考え方によれば、言語は既にその起源からメタファーとしての構造を持っていることになる。先に見たド・マンの論旨によれば、ロックが批判し、コンディヤックやカントが修正しようとしても首尾よく進まなかった、亡霊のようなメタファー偏在論とでもいうべき状況は、ニーチェにおいてはすでに自明のこととして批判の、あるいは評価の対象となっている。言語の動きとは、メタファーというずれを生み続ける自己再生産にはかならないというわけだ。

デリダも、その領域をとりあえず「哲学」と限定してはいるが、西洋の思想、ひいては言語の再生産メカニズムが「隠喩」であることを前提に、次のような展開をしている。すなわち、本義と転義の転換作用を一旦認めたくて、そのような構造自体に対し、肯定的にせよ否定的にせよ、何らかの評価をおこなうという「脱構築」の「身振り」である。拙論（鈴木 2010）で以前に一度引いたことがあるが、核心となる部分なので、再度引用しておく。

一方では哲学の産物にとどまる隠喩概念を利用しながら、哲学の隠喩系をそれとして外部から支配することは不可能である。すると、ただ哲学のみが隠喩という自己の生産物に対して何らかの権威を専有することになるだろう。だが他方では、まさに同じ理由から、哲学は自らに与えるものを剥奪されている。自分の用いる道具立てが自分の領野に属しているゆえに、哲学はみずからについての一般転義学と一般的隠喩系を支配する能力を持ち得ない。（…中略…）したがって「基礎的」「構造づけの」「根源的」と言われる哲学的諸対立の構造化を条件づけたいくつもの転義を形容するための、固有に哲学的なカテゴリーは定義上存在しない。すなわち「基礎的」「構造づけの」「根源的」といった語はすべて、そうした転義学の表題を構成するような「隠喩」なのだ。そして、「言い回し」「転義」「隠喩」といった語もこの規則を免れはしない。（デリダ 2008：111）

このデリダのテキストから、つぎのような解釈を引き出すことができる。起源を暗示すると同時に、そのような起源へ遡る試みの無効性を告げるような、相反するベクトルを持つ両義的な展開。さらには、とりあえずメタファーが言語の転義的自己再生産の構造を保証するように見せつつ、結局はそのメタファーを理論的に消し去る身振りまでもメタファーへと転換し、隠喩の意味そのものを「宙ぶり」状態へと導いていく。

このようなデリダの仮借なき追い込みに対し、ド・マンははるかに優しい。文学に対する突き放しと同時に救出の試みも忘れない。

一般に信じられている通念とは逆に、文学というのはメタファーからなる不安定な認識論が美的な快楽によって宙吊りにされる場などではけっしてない。なるほど、そうしようという試みが文学の体系を本質的に構成する要素であるのはたしかである。しかし〔認識論

的な〕厳密さと〔美的な〕快樂を一点に収斂させることができるという見方など錯誤に過ぎないことが示される場、それが文学なのである。(ド・マン 2013: 126)

ド・マンがメタファーの歴史的な否定的見解の先に救出しようとするものは、文学におけるメタファーの自己再生産構造の産物であり、対象(シニフィエ)という束縛から逃れた言語の自己増殖メカニズムでもある。ド・マンは『美学イデオロギー』所収の別論文『アイロニーの概念』において、このような状況を「貨幣にも似た」メディアとしてのメタファーと捉え、その動きをド・マンは、いわばシニフィエなきシニフィアン(戯れ)とも性格づけている。それは「純然たる循環、シニフィアンの純然たる循環ないし戯れ」(ド・マン 2013: 425)なのである。さらに、これがシュレーゲルの「イロニー」ということばの装いを纏うと、言語の「一つのマシン」、すなわち自律的運動ないし自己再生産する「テキスト機械」となり、「反省モデルと弁証法モデルを解除する」ものとなる。(ド・マン 2013: 415)

むろん、救出しようとする意欲が勝るド・マンにとって、このような動きは「形成物を破壊することを通じて、なおも構築しようとする逆説的な試みを具現するもの」(ド・マン 2013: 429)ととりあえず肯定的に評価される。冒頭に挙げた、「メタファーをメタファーとしてみる」場合に生起する反転構造を、何重もの屈折と距離を置きながら眺めるデリダの場合とは異なり、ド・マンは擁護するのである。アドルノの「否定弁証法」のごとく、デリダにとっては、何らかの肯定的あるいは否定的な身振りはことごとく寸前で解体され、保留状態へと棚上げされていく。それではデリダを引き継ぐと見なされるド・マンは、徹底性を欠いていると捉えればよいのだろうか。それとも、デリダの反転する身振りの自動化に対して、さらなるメタファーを重ね、歯止めをかけたと考えるべきなのであるだろうか。

再び、ルーマンの理論に戻る形で、まとめておく。ルーマンはラディカル構成主義といわれる。(大澤: 2019) その意味するところは、彼のシステム理論は實在論の立場を取らない、少なくとも前提としないところにある。対象は観察と相関的に生ずる。社会はこの差異の観察という形式で、コミュニケーションを起動する。ルーマンによれば、コミュニケーションは「意味の移送」という比喩などで表されるものではなく、「情報と伝達という特殊な区別を用いて観察が行われる一つの様式」(ルーマン 2009: 68)である。その現象自体も、その区別(=差異)が観察される理解の場で「事後的に」、初めて認められる。この観察は、更なる観察による差異化の対象となり、二次観察へと接続していく。

メタファーも「事後的に」それと認知される。ある表現が、本義と転義との二重性(同一性)を観察しつつ差異化する現象を引き起こす。この現象が連続する観察プロセスにおいて、さらなる言及対象となり、新たな本義と転義の同一化と差異化の二重の観察を、継続的に生み出していく。このプロセスは、ド・マンが言語の本来の動きとして、連続するメタファーの繋

がりとして定式化したものにほかならない。メタファーのオートポイエーシスである。

冒頭で述べた、「学的な道具」としてのメタファーというのは、メタファーの一回的な、切り取られた特性を捉えているに過ぎない。ロックやコンディヤックには厄介者扱いをされ、カントに治療の処方箋を書かれ、ニーチェやデリダにおいては見通せないほど恣意的に反転されたメタファー、すなわち言語一般に譬えられたメタファーとは、メタファーに対するメタファー、継続するメタファーの二次観察、メタファーの自己再生産を意味するのであろう。ルーマンの言葉を借りれば、メタファーのオートポイエーシスと考えることができる。そこからパラドクスもトートロジーも真偽の決定不可能性も引き出すことができるであろう。自らを呑み込みつつ増殖することばのメカニズムは、そのような形でしか記述できないということか。ド・マンのメタファー論はそのような事情をメタフォリカルに伝えているように思われる。

<参考文献>

- Adorno, Th. W. (1997) *Negative Dialektik*, Frankfurt a. M.
- Blumenberg, Hans (1999) *Paradigmen zu einer Metaphorologie*. Frankfurt a. M.
- 大黒岳彦 (2018) 『ヴァーチャル社会の〈哲学〉』 勁草書房
- デイヴィッドソン、D. 野本和幸他訳 (1991) 『真理と解釈』 勁草書房
- ド・マン、P. 土田知則訳 (2012) 『読むことのアレゴリー』 岩波書店
- ド・マン、P. 上野成利訳 (2013) 『美学イデオロギー』 平凡社
- デリダ、J. 藤本一勇訳 (2008) 『哲学の余白 (下)』 法政大学出版局
- ギブズ Jr.、レイモンド・W. 辻幸夫他監訳 (2008) 『比喩と認知—心とことばの認知科学』 研究社
- ホフスタッター、D. 野崎昭弘・はやしはじめ・柳瀬尚紀訳 (1985) 『ゲーデル、エッシャー、バッハ—あるいは不思議の環』 白揚社
- ホリオーク、K. J.／サガード、P. 鈴木宏昭他訳 (1998) 『アナロジーの力』 新曜社
- ヘッセ、M. 高田紀代志訳 (1986) 『科学・モデル・アナロジー』 培風館
- Hörsch, J. (2011) *Der Sinn und die Sinn; Eine Geschichte der Medien*. Berlin (邦訳は、ヘーリッシュ、J. 川島健太郎他訳 (2017) 『メディアの歴史』 法政大学出版局)
- 柄谷行人 (1983) 『隠喩としての建築』 講談社
- レイコフ、G. 池上嘉彦他訳 (1993) 『認知意味論』 紀伊國屋書店
- レイコフ、G.・ジョンソン、M. 渡部昇一他訳 (1986) 『レトリックと人生』 大修館書房
- Luhmann, N. (1998) *Die Gesellschaft der Gesellschaft*. Frankfurt a. M. (邦訳は、ルーマン、N. 馬場靖雄他訳 (2009) 『社会の社会 I・II』 法政大学出版局)

松浦好治（1993）『法と比喩』弘文堂

Nietzsche, F. (1988) *Ueber Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinn*. In: Kritische Studien Ausgabe 1. München (邦訳は、ニーチェ『道徳外の意味における真理と虚偽について』(1995)『ニーチェ全集第I期第2巻』白水社)

野矢茂樹（2011）『語りえぬものを語る』講談社

大澤真幸（2018）「根源的構成主義から思弁的實在論へ …そしてまた戻る」『現代思想』48(1)、pp.61-66

佐藤信夫（1992）『レトリック認識』講談社学術文庫

鈴木純一（2010）「「メタファー」と「メタ思考」」『メディア・コミュニケーション研究』58、pp.39-56

鈴木純一（2018）「歴史記述と喩法に関する一考察」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』27、pp.87-98

鈴木純一（2019）「社会理論における観察概念から見たメタファーの機能」『メディア・コミュニケーション研究』72、pp.75-93

高田紀代志（1986）：訳者あとがき（所収：ヘッセ、M. 高田紀代志訳（1986）『科学・モデル・アナロジー』培風館）

辻幸夫編（2001）『ことばの認知科学事典』（2001）大修館書店

ホワイト、H. 岩崎稔監訳（2017）『メタヒストリー』作品社

-
- 1 研究者によってメタファー（隠喩）という言葉の意味の範囲には多少の揺れがあるが、ここでは広く、喩法一般（比喩的表現一般）を指す言葉として用いる。
 - 2 この事情の詳細に関しては、拙論（鈴木2018）を参照されたい。
 - 3 メタファーの抱える自己言及パラドクスというこの問題に、日本でいち早く言及したのは柄谷行人であろう。（柄谷1980）

（2020年11月26日提出、2021年2月25日受理）

《SUMMARY》

Metaphor by Paul de Man

Junichi SUZUKI

The purpose of this thesis is to examine the concept of a metaphor by Paul de Man. A metaphor generally seems opposed to strict thought. A thinker as Locke criticized a metaphor for its meaning. But from the angle of the self-reference Paul de Man marks the function of the metaphor. By this method he estimates a metaphor highly and develops its possibility. A metaphor involves “cutoff” and “connection” process at the same time while duplicating the meaning of the expression. In other words, a metaphor functions as inconsistent two at the same time. A language reproduces oneself by this way and does a self-controlled movement. This feature enables that a language regards itself as a metaphor. Paul de Man participates in the thinking genealogy of Nietzsche and Derrida on this point.

